

くれよん



2015年 2月号

2月と言えば『豆まき(鬼)』ですね。各幼稚園や保育園では、先生達が鬼に変身して子ども達を楽しませている(?)ようです。子ども達の中には先生だと分かっている、泣いて必死に逃げ回る子もいます。

豆まきと同様、秋田県では大晦日に、『なまはげ』が「悪い子は、いねーがあ」と言って、子ども達を脅かすようです。

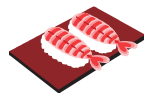
以前から、「これって、子ども達のトラウマになるんじゃないの?」と思っていましたが、つい先日、本来の意味が分かりました。子どもが怖くて親のところに逃げた時に、「お母さん(お父さん)がいるから大丈夫だよ」と抱きしめてやることで、「親がいれば安心」ということを伝えるための行事だそうです。怖がる様子を見て、強くしようと子どもを鬼の方へ押しやってはいけないということですね。「何かがあったら受け入れてくれる場所がある」と安心感が育っている子は、どんどん自分から世界を広げていけると思います。



… 風景 …

私は、子どもと同じでテレビのコマーシャルが大好きです。短い時間で伝えたいことをインパクト強くまとめていると関心して見えています。最近、お父さんと子どもが自転車の練習をしているのが気に入っています。子どもがなかなかうまくならないので、お父さんはいらいらして怒ってしまいます。ここまでは、どこの家庭でもある風景ですね。次にお父さんが、「ごめん。お父さん、気が短いから」と言って謝り、「お寿司 食べに行こうか」とお父さんが自転車で乗って、その後を子どもが走る、最後はお寿司をほお張る子どもの笑顔で終わるというコマーシャルです。

「おとうさんは偉い!」と思います。大人はなかなか子どもに謝ろうとしないものです。「怒っているのはおまえが悪いのではなく、お父さんが気が短いから」と言われたら、子どもはとても救われますよね。



大人だって、いつも完全ではられません。調子が悪い時、心配ごとがある時、つい口調を荒立てて言ってしまうことが多々あります。「ごめんね。おかあさん、今日調子が悪いんだ」と、一言伝えるだけで、子どもは自分のせいだと思わなくて済みそうですね。

「子育て力」アップには 「わかってもらえている感」が大切

子育て親育ち読本Ⅱ 石川 丹 著
(社会福祉法人 楡の会)から

子育てで一番大切なことは、先ずは子どもの中に「お父さんお母さんは僕(私)をわかっている感」を作る事です。

人間誰でも人と付き合う時、自分の事をわかっていると思える人と付き合いたくなるものです。「あの人は僕(私)の事をわかっているんだよね」と思える人に対しては、どんどん話かけたり関わりたくなるものです。

わかっている人は「気持ちを通じやすい、仲間だ、味方だ、良い人だ、信頼できる」と思える人です。だから、その人の話を聞きたくりますし、その人のやっている事をお手本にし

て真似したくもなります。

親子でもそうなのです。子どもからすれば、親は自分の事をわかってくれていると思えば、わかっている人の言う事を聞こうという意欲が子どもの心の中に増えますから、親にとっては聞き分けが良いと思えることが増えます。

大人は相手の目の色を読み、相手が自分を理解しているかどうかを判断できます。しかし、子どもは他の人の目の色を読んでその人の心の内を推測することが未熟です。

ですから、子どもの心の中に「この人は自分のことをわかっているんだ」という気持ちを作るには、子どもに関わる人がその子の気持ちを言い当て、子どもに知らせる事が非常に大切になります。

子どもの心の中に“わかってくれる感”“わかってもらえている感”を作る方法は、“図星を言う”ことです。“図星を言う”とは、大人が子どもの心を推測し、ズバリ言い当てることです。

例えば、子どもが喜んでいたら「うれしいね」、怒っていたら「怒ってる」、「悔しそうに泣いていたら「悔しいね」、何か出来たら「やったあ!」、はにかんでいたら「はずかしい」、騒いでいたら「テンション上がってる!」、固まってしまったら「困った・・・」、片付けしようとしなかったら「お片付けしたくないんだ」、怒って物を投げたら「怒った」「投げたいんだ」、人をたたいたら「たたいたちゃった」、走り出したら「走りたいんだ」・・・など、子どもの気持ち、意図、行動を大人がことばに出して言って聞かせてあげることが「図星を言う」ということです。



子どもに親しく関わる人が、日頃から「図星を言う」ことをしていると、子どもの中に、「図星を言ってくれる人は、僕の事をわかっているから良い人だ。味方だ」「良い人、味方がいるんだから安心だ」と安心感が広がります。

子どもに“わかってもらえている感”“わかってくれている感”“良い人だ・味方感”“信頼できる感”を作れば、わかっている人なんだから、その人の言うことなら聞こう、という意欲が湧き上がり、その人に向かって心を開こうとする気持ち、つまり「聞く耳」「ダンボの耳」を作ることができます。

例えば、一緒に歩いていた子が急に走り出したら、すぐに「走らないよ」と否定的に言う、つまり、ダメ出し先行が日本の伝統的な普通の躾教育ですが、「図星を言う」という心理療法ではそうではなく、「走りたいんだ。ゆっくりね」と、否定的ことばがけを先行させず、図星を言って聞く耳を作っておいてから、やっぱりいい、好ましい行動を提示します。

そうすると、ダメ出しされたら生じるはずの反発する気持ちが湧き上がらずに、「ゆっくりね」という誘いにスーッと乗って、走ることを止めてしまうようになるのです。

ですから、『図星を言ってから叱る』ことです。『叱る』とは、『教え諭す』事です。

“図星を言う”ことの後に手本を呈示すると、聞く耳が出ていますから、子どもは大人からの「～やってみよう」「～して」「～しなさい」ということばがけに乗りやすくなります。

やってみようよ!
“図星を言ってから叱る”

